

## 特集：メディア化された身体／引き裂かれた表象 ——東アジア冷戦文化の政治性の趣旨

戦時期東アジアでは、プロパガンダを目的として移動する特性を持つ視聴覚メディア／身体表現芸術（ラジオ文化・演劇・映画・音楽）が発達した。それらは戦後の国際的・政治的大変動と文化人の大移動を経て、いかに冷戦期へと引き継がれ、あるいは変質したのであろうか。

本特集は、2021年1月23、24日オンラインで開催した同題目のシンポジウム\*に基づいている。当初、本シンポジウムのキーワードは「不可視化された身体」であった。その時点で想定していた「不可視」とは、その身体を生きる人間の外面的なパフォーマンスの下に、意図的に秘められた、或いは無意識に潜伏したアイデンティティないしイデオロギーを指している。

身体とは、COVID-19の例を挙げるまでもなく、様々なものの媒介となる。芸術には、身体を媒介として伝達される要素が多い。典型的なものとして、書物を通してよりも人から人への継承を基本とする歌・語り・マイム・殺陣・舞踊など演劇的な諸技能が挙げられるだろう。また、ある特定の舞台俳優、映画俳優の表現するもの——オーラや審美的な要素だけでなく、本人の意図によらず意味づけされたもの——も同様である。本シンポジウムでいう「メディア化された身体」とは、芸術の伝達手段として使われる身体を指すとともに、様々なイデオロギーを受け手に向って媒介する身体であり、いっぽうでそれらを戦略的に媒介する身体でもある。

「引き裂かれた表象」とは、一つの表現主体の意図とは矛盾する、或いは相反する表現を強いられて表象されたものを指す。それは時の政権、地域外の圧力によって、または往々にしてそれらを背景とした個人間の権力関係によって起こる。

時代としてはタイトルに「冷戦」を掲げてはいるが、戦後の東アジア諸地域における数回の分断を踏まえつつ、戦中から冷戦期にかけての連続性と継承を意識している。

「東アジア冷戦文化の政治性」に関して、戦後から冷戦期にかけて焦点となる事象の大枠を、ごく簡単に辿っておく。第二次大戦後、GHQ占領期から日米安保体制初期の日本、国共内戦から建国後の中国、香港、ポストコロニアル台湾の間で大勢の文化人が帰還・移住・亡命した。いっぽう戦時中の居住地に残留した人々もいた。文化人たちは戦前の身体表現とその技能を、新しい政権に相応しく、いかに変容させるべきか苦悩した。往々にして彼らは戦前のキャリアを自ら否定し、抹消した。中国に残留した日本人芸術家、技師たちは敗戦国民の身分を隠し、中国の芸術産業に技術をつないだ。

台湾人、朝鮮人は民族アイデンティティを取り戻した。戦時下潜伏していた文化人たちの一部は、新体制／反体制の文芸を創始したかのように見える。しかし彼らの表現は、既に脱ぎすてたはずの「皇民」の身体の記憶ないし植民地的身体の記憶に根差していた。

こうした東アジアの諸地域のポストコロニアル状態において、さらにアメリカニズムが浸透していき、いっぽうでは、左派の文芸が様々なジャンルで勃興した。

以上の通り、本特集は冷戦期東アジアにおける視聴覚メディア／身体表現芸術を対象に、特に戦前戦中から冷戦期への継承面の検証を意識しつつ、不可視されてきた諸側面を解説し、その意義を検討するものである。

\* 共催：名古屋大学超域文化社会センター、文部科学省科学研究費による共同研究「貫戦期における日中映画の越境と協働をめぐる総合的研究」（課題番号20H01222、代表者：晏妮氏）および「建国初期中国を移動する身体芸術メディア・プロパガンダ―戦時期からの継承と展開」（課題番号18H03568、代表者：星野幸代）